

連載 第15回 福聚山史

篠原 重一 文
及川 一晋 編

本山と常円寺

3、本山と常円寺と水戸光圀

本土寺と常円寺の本末の關係が、正確にいつの頃から始まったのかは定かではない。だが、先に記したように本山本土寺は二十一世日信上人（常円寺が屬する眞師法縁の縁祖日眞上人の弟子といわれる）の時代には完全に不受不施派より受派の系統に組み入れられているので、それは同時に当山によやく日の当たるようになった頃の江戸時代前期の後半・元禄期と考えられる。その理由は、以下の本土寺の記録からも推察できる。

日信上人は徳川副將軍水戸宰相光圀と親交を持ち、一度ならず参詣あつて、水戸徳川の祖に当たる武田信吉一族を菩らい、秋山夫人の墓を改葬し、供養料として二十石六斗の朱印地を寄進した。また、参道に植樹したと伝え、現存する大木はそれである。

また、常円寺と水戸光圀公との關係を知る唯一の記録が、『御府内寺社備考』の「文政二年 丁亥書上」にある。

本尊宗法之通諸尊安置

右諸尊仏八水戸黃門光圀様御造立御施主二御座候

この文政期の記録には、

当時常円寺にありし御本尊の諸尊像は光圀公の寄進であると記されている。また、さらにそれ以前の光圀公が藩主に就任した寛文元（一六六一）年の頃、光圀公と本山本土寺との關係は前記の文章からもわかるように、深い關係にあつた。それは光圀公が水戸街道小金宿を通りかかった時、本土寺参道脇にあつた秋山夫人の墓碑であつた。秋山夫人とは徳川家康の側室の一人の、下山の局おつまの方のことで、甲州秋山氏の出身だ。十六歳で家康の側室に上がり、万千代を生み、後に万千代が小金三万石の領主になると秋山夫人も小金に移り住んだ。小金は平賀をも含む広い地域を指すが、小金城は本土寺の近くにあり、秋山氏は代々法華



本土寺 鳥瞰圖(平賀本土寺発行のパンフレットより)

經を信仰したといつので、城主の生母として本土寺に葬られたという。その墓碑に偶々めぐり合つた光圀公が境内の内にある現在地に改葬したのである。墓碑銘に「貞享元年 光圀」と記されている。ちょうどその頃、常円寺も寺院としての体制を整える時代であり（一五八五年に幡ヶ谷より現在地に移転し、一七二〇年には庫裏の再建をしている）、本山本土寺を介して光圀公の外護を受けることとなつたのではないだろうか。それは折しも、幕府による本末制度が成立した時代であつた。

光圀公は領国水戸へのお国下りの際に、また、上府の道すがらに水戸街道小金の宿を通る。現在も、宿の北側にある旧八坂神社の入り口の隅に「自是本土寺道八丁」と刻まれた石標が建つており、古来の参道を示している。黄門様は幾度かこの道を辿つて、本山平賀本土寺にお出ましになられたのであろう。そして、もしかや諸国漫遊？の折り、この成子常円寺にもお参りいただいたのかもしれない。

(つづく)